

SUMMER GRAVITATION

今窓を開けたなら、きっとセミの鳴き声に混じって陽射しの音が聞こえてくるだろう。そんな気持ちにさせるだけの魔力が今日の太陽にはあった。ここ数日の曇天と、徹夜明けの目のことを差し引いてもなお。

透き通った窓ガラスは目を離せば今にも溶けてしまいそうで、その向こうのこれまた透き通った青空に吸い込まれないためには、しばらく見張っておく必要がありそうだった。視界の端で GAMEOVER を主張するモニターは、いつもなら自分に釘付けになっているはずの主人の気を引こうと必死に明滅したが、叶うはずもなかった。夏だ。

最後の一本。
思っていたより買い込んでいた蝋燭のせいで、あと二十分も待たせてしまう。火は何度でも点け直してしまおうから、蝋燭に限りがあったってよかった。日付が変わってからの十分間と、あと二十分待ったための言い訳。

三十分まで遅刻じゃない

ラムネは美味い

今年の夏は一人だっ
た。夏祭りも、花火もみていない。一人で眺めても虚しだけぞと思っただけ。
去年は夏祭りがあって今日、買い物ついでにラムネを買った。
青い容器がグラスに注ぎ、去年飲んだものより冷えて炭酸の強いラムネを味わう。
一人で飲むラムネは初めて知る味がする。